

祈りの研究（その5）

—— 教会に対するパウロの祈り ——

鵜丹谷 三千代

どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように

エペソ人への手紙 1：17-18。

はじめに

エペソ書は、パウロがローマの獄中から、エペソを主とする小アジアの諸教会に、回状のように廻し読みをしてもらうために書いた手紙といわれている。前半3章は、教理的記述、後半3章は、キリスト者の生活についての教えである。

1章は、1、2節の書き出しの挨拶のあと、3-14節でパウロは、神をほめたたえている。

その第一は、4-6節、神の選びのすばらしさ。第二は、13-14節、聖霊の働きのすばらしさである。そのすべては、神の栄光をほめたたえる者とさせるものであると語る。

そこで、15-23節でパウロは、「あなたがたの心の目を明らかにして下さるように」（1・18）と、神の召しと聖徒がうけつぐものが、いかに栄光に富んだものであるかを知るようにと祈っているのである。

本稿は、このパウロのエペソ人への手紙から特に、1章15節から23節を中心にパウロの祈りを黙想して、記すことにした。

1.

パウロはエペソ書簡の1章において、祈りの内容（1・15-23）と神への賞賛（1・3-14）を結びつけている。次のようなエペソの人々に対する初めの言葉が、この結びつきを表している。「こういうわけで……あなたがたを覚えて、絶えずあなたがたのために感謝している。」（1・15-16）と。

こういうわけで、という言葉は、その前にある考え方に触れている。そこでは、神が「キリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福し」（1・3）てくださったゆえに、ほめたたえられている。

この祝福の最高のしるしは、「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び……あらかじめ定めて下さったのである」（1・4-5）。

こういった祝福は、私たちに本来備わっている善性や価値のゆえに与えられたのではない。それらの祝福はすべて、「これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである」（1・6）。このイエスとの関連から、パウロは御父の命令でイエスが成し遂げられたことを少し詳しく述べている（1・7-10）。続いて、パウロは次のような中心主題に戻っている。「わたしたちは、御旨の欲するままにすべての事をなさるかたの目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである」（1・11）。それは、私たちも「神の栄光をほめたたえる者となるためである」と。

パウロは、手紙の読者に、「わたしたち」と述べてきた人々には、彼ら自身も含まれていることを、大胆に確信してもらいたいのである。「あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、……約束された聖霊の証印をおされたのである」（1・13）。神の祝福は、「約束された聖霊」（1・13）というすばらしい賜物を含くんでおり、しかもこのすべては「神の栄光をほめたたえるに至るためである」（1・14）。

2.

こういうわけで、自分は祈るのだと、パウロは言う。すなわち、エペソ人への手紙にあるパウロの祈りは、神の主権のもとで、どのように祈るかという模範である。特に、パウロの祈りの報告は、神の主権の三つの面を強調している。

- (1) パウロは、神が主権者であるゆえに、手紙を読む人々の人生における、神の介入によるこのうえない恵みを感謝している（1・15-16）。

パウロは、手紙の読者の「主イエスに対する……信仰」と「すべての聖徒に対する愛」（1・15）とを聞いて、彼らの回心と変化の中に、人々の人生に対する神の主権ある恵み深い介入のすばらしい実例を見ている。

彼らの「信仰」（おそらくここでは信頼と忠誠の両方を含む）は、主イエスを揺るぎなく信じ、彼らの性質は変えられている——それは、神秘的、感傷的な変化ではなく、単なる心情的かつ私的な生き方においてでもなく、彼らが「すべての聖徒に対する愛」を豊かに示している公の領域において、変えられている。彼らの信仰と愛について聞いたパウロは、そのことについて感謝を捧げ、またそのことを祈り求めるのである。

それでもやはり、「こういうわけで」という言葉によって、パウロは祈りを彼ら自身の信仰と愛の報告に結びつけるというよりは、彼らの信仰と愛に明らかに示されているものとして、神が主権をもって彼らのうちになしてくださったことに鮮やかに結びつけている。神こそ、彼らのうちに働いてくださった方なので、パウロは神に感謝せずにはおれないのである。神だけがこのような変化を主権をもって恵み深くなし続けてくださる方なので、その神にこそ善なる働きをなし続けてくださるように嘆願すべきなのである。それでパウロは「わたしの祈りのたびごとにあなたがたを覚えて」と（手紙の読者たちに）約束している。すなわち、神が主権者であるゆえに、パウロは手紙を読む人々の人生における、神の介入によるこのうえない恵みについて感謝を捧げているのである。

もちろん、神の力強い、変化をもたらすみわざがなければ、この人々は決して回心に導かれなかったといえる。神が働いてくださらなければ、彼らは信頼も忠実も、また今や彼らの人生において豊かに示されている愛も、決して示すようにならなかったであろう。

- (2) 神が主権者であるゆえに、パウロは神の民の救いにおける神の主権ある聖いみむねが成し遂げられるように、とりなしの祈りを捧げている（1・17-19）。

パウロの祈りは、エペソの人々がさらによく神を知るようにということである。それこそ、聖書の告げていることである。祈り求めたあらゆるものの中で、そのことはパウロが最優先に挙げている項目である。「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように」（1・17-18）。

それでは、どうすれば神をますます知るようになるのか。それは、神をさらによく知るための知恵と啓示の御霊を与えてくださるように神に求め、祈りにおいて神に近づくことによって実現するのだと、パウロは言う。

ここで、パウロが祈りにおいて第一に呼びかている方は「わたしたちの主イエス・キリストの神」であり、「栄光の父」である。前者の表現は、私たちが祈っている方は救い主である御子イエスを、すなわち私たちの主イエスを通してご自身を最大限に現してくださった方であることを思い起こさせる。神の祝福のすべては御子を通して与えられ、さらに、神の新しい契約の祝福は、御子によってすでに私たちに保証されているので、イエスの名によって祈ることや、神をイエス・キリストの父と呼びかけることは、神が私たちの嘆願に答えてくださる根拠、すなわちイエスご自身を認めることなのである。

後者の「栄光の父」という栄光は、しばしば神の領域と、神の恵み深い自己顕現とに結びつけて考えられている。従って、アブラハムがまだメソポタミアにいたとき、現れてくださるのは栄光の神である（使徒7・2）。

モーセは、神をさらに知りたいと思うとき、全能なる神にその栄光を見せてくださるよう懇願し——この神はご自分の栄光のほんの一部にせよ、示しておられる（出エジプト33・18-23）。

イエスは、父の領域、すなわち世界が存在する前に御父と共有しておられた栄光に戻ることを望んでおられる（ヨハネ17・5）。そうではあっても、イエスが地上でしてこられ、十字架で最大限に行われることは、神の栄光を明らかにすることである（ヨハネ1・14, 2・11, 12・27, 28）。

栄光は、キリスト者の究極の目標であって、すでに私たちは「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」（IIコリント3・18）。

こういうわけで、パウロにとって栄光の父に祈ることは、神だけのものである領域を認識していると告白することであり、神の恵み深い自己顕現への感謝を述べることであり、キリスト者の究極の希望として御父の領域を示すことなのである。

パウロの祈りに答えてくださる神とはどのような方か。それは、私たちの主イエス・キリストの父である神である。なぜなら神のあらゆる祝福は、キリストのみわざを通して私たちに与えられているからである。さらに、キリスト者は、キリストを通して神に結びつけられている。キリストにあって、キリスト者は選ばれ（1・11）、神は「御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである」（1・9）。そのうえさらに栄光のうちにある神が、恵み深くその栄光をさらに示して下さらなければ、どのようにキリスト者たちは神をさらに知り続け、その栄光に入る日のために備えていけるのか、である。

第二にパウロは、キリスト者が、神をさらによく知るようにとだけ祈っているのではなく、キリスト者が神をさらによく知るために、神が知恵と啓示の御霊を与えてくださるようにと祈っている。そこには望んでいる目的を達するための手段がある。

求められているものは、御霊によって取りつ

がれる知恵と啓示である。神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである（Iコリント2・10）。

神の御霊による働きだけが、神をさらによく知ることを可能にする。それゆえに、この御霊の働きを祈り求める必要があるのである。

特に、パウロが神に祈っているのは、きわめて重要な真理をわきまえるために、キリスト者が必要な識別力を持つようにということである。神が御霊によってご自身を啓示してくださるよう求めるのと同様に、手紙を読む人々が物事をわきまえるようになるために、彼らの心の目が明らかになることを（1・18）、神に求めている。

従ってある意味では、これは同じ嘆願の連続であり、またその嘆願の裏返しでもある。御霊は啓示を与えてくださる。神が御霊によって啓示してくださることをわきまえるために、私たちは霊的な機能を整えていただく必要がある。しかし、パウロがこのどちらをも祈っているということは、啓示を与え、同時にその啓示を私たちにわきまえさせる方は最終的に神、神お一人であると、パウロは理解していることを表している。これこそパウロが祈っている理由でありキリスト者が祈らなければならない理由である。

この祈りは、キリスト者の生活と成長のすべてにわたる基礎をなすものである。

それでは、パウロが手紙の読者に対して、開かれた目で知ってほしいと特に望んでいるものとは、何か。

まず、パウロはエペソの人々の召しの希望——つまり彼らの救いの目標——を理解してほしいと願っている（1・18）。この召しの希望とは、召しの局面、あるいは人が待ち望み続ける救いである。将来において待ち望む救いの構成要素である。言い換えれば、この「希望」は新天地にあるいのち、神の御前でいのちにほかならない。「神の栄光にあずかる」（ローマ5・2）ことであり、「わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、……キリストと共に栄

光のうちに現れる」(コロサイ3・4)。

それは「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない」(5・27)ものとなって、キリストにお会いするという期待である。

また、二番めの祝福としてパウロが、手紙の読者に対して理解できるようになってほしいと思っているのは、「聖徒たちがつぐべき神の国がいかに栄光に富んだものであるか」(1・18)と、いうことである。すなわちパウロは、神が、わたしたちの上に定めてくださっている価値を、私たちが認めるように望んでいる。そしてその価値は、私たちが本質的にふさわしいからではなく、私たちがキリストと結びつけられていることによる。

三番めにパウロは、「わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるか」(1・19)を、知るように願っている。

要約すれば、神が主権者であるゆえに、パウロは神の主権、神の民の救いにおける聖いみ旨が成し遂げられるように、とりなしの祈りを捧げている。とりわけ、神に祈っているのは、私たちが神をさらによく知って、いくつかのきわめて重要な真理——私たちの召しの希望、聖徒の受け継ぐものの栄光の豊かさ、私たち信じる者に働く神のすぐれた力——を理解するためである。

(3) 神が主権者であるゆえに、パウロは神の力の非常に印象的な現れを概説している(1・19-23)。

パウロは、キリスト者に経験してほしいと思っている神の力を説明した後で、最も栄光ある、最も啓発的なものを求めている。その結果は、

① パウロは、キリストが死からよみがえるときに働いた神の力を述べている(1・20)。キリストの復活は、死を滅ぼして新天地の始まりとなる、力強い復活の初穂なのである。パウロが、他の書簡で、キリストとその復活の力を知りたいと宣言している(ピリピ3・10)のも当然である。

② パウロは、高く上げられたキリストのうちに表わされた神の力を述べている(1・20

-21)。

キリスト者が経験しなければならない力とは、神がキリストを「天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれ」(1・20, 21)たときに、キリストのうちに働せたような力である。

③ パウロは、キリストによって教会のためにすべての上に働く神の力を述べている(1・22-23)。

神の主権のすべてはキリストを通して現され(Iコリント15・27, 詩篇110・1), この主権ある力のすべては教会の益のためである。

キリストは、神の主権のすべてが神の民の益のために働くことを保証するために完璧な位置に置かれている。すなわち、「万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた」(1・22)からである。

この教会は、キリストのからだであって、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものにほかならない(1・23)のである。

この章の最後にいたって、パウロはこれまで誰一人として持ち得なかった、最もすぐれて、最も大胆で、最も高揚された思想の一つを述べている。すなわち、23節において、パウロは、教会を最もすぐれた称号である「キリストのからだ」と呼んでいる。

キリストは教会のかしらであり、教会はキリストのからだなのである。頭だけでは役に立たないし、知力も頭脳もそれだけでは役に立たない。頭には命令を下すことのできるからだが必要でなければならぬし、頭脳や知力は、それを通して働くことのできるからだをもたなければならない。

教会は文字通り、キリストの便信を担って走る足であり、キリストのことばを語る声である。

この23節にいたって、パウロは二つの実にすばらしい思想を述べている。

パウロのことばに従えば、教会はキリストを補足して完成するのである。ちょうど、からだ

を語る一番はじめと、それぞれの働きの終わりの部分に四回「神の栄光がほめたたえられるため」と記されている。(1・3, 6, 12, 14)。

すなわち、神の祝福が私たちに注がれるのは、すべて私たちが、神の栄光をほめたたえるためだとパウロは力強く宣言しているのである。

ここに、私たちの人生の究極の目的が示されている。

またパウロは、神を知るための知恵と啓示の御霊を与えられ、心の目が明らかにされて、召された者の望み、聖徒の受け継ぐべき光栄・神の力を知るようにと祈っているが、神のことは神の御霊による以外は知ることができない (I コリント 2・10-11)。

私たちも、神を知る知恵と啓示の霊を注いでくださるように、熱心に主に祈り、神の真理が示されるように、パウロの祈りに唱和していく者に招かれていることに感謝したい。

そのとき、天地のすべてのものを支配するキリストが教会に与えられていることのすばらしさをほんとうに悟り、心から神をほめたたえることができるからである。

参考、引用文献

- 1, 口語訳聖書
- 2, NTD新約聖書註解
- 3, 新約聖書注解 いのちのことば社